
リリカルなのはVivid-NewGeneration0084

無目藻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのはVivid - New Generation0084

【Nコード】

N1554X

【作者名】

無目藻

【あらすじ】

新暦0084年。とある管理世界でおきた駐屯地襲撃事件。

その捜査に向かったティアナ率いる特務部隊「夜の梟」。

フクロウ

その夜の梟の隊員の高町ヴィヴィオはそこで三年前に死んだはずのなのとは対峙する。

このなのはの正体は何なのか。そして、これが引き起こす次元世界を揺るがす事件とは？

作者がストレス発散の為に書くこれは精神描写がめんどくさいぞ！

プロローグ（前書き）

このお話はある程度力オスな人にしかおすすすめ出来ません。

プロローグ

無人世界・・・

ジャングルを進むと、その中に自然の産物ではないであろう灰色の建築物が身を潜めていた。

入り口にはこの建物の正体がわかるようなものは一切なかった。

しかし、このような人目につくことを避けているのが見え見えの建物内で慈善活動が行われていたりする事は十中八九無い。

入り口をくぐると薄暗い玄関があり、その奥にある鋼鉄製の扉が来るものを拒んでいた。

ハンドルを五回半回し、手前に引くと重々しい音をたてながら扉は動く。

そして、その先の空間はやはり薄暗いが、人影が見てとれた。

十、十二・・・この部屋の外にいるものも含めると結構な人数になることだろう。

彼らは皆揃ってその白く不健康な痩せ顔にある淀んだ大きな眼球を一点に集中させていた。

その視線を追うと、一つの液体に満たされたポッドが目飛び込んできた。

そのポッドの中では一人の栗色の髪をした十歳前後の少女が目を閉じて、穢れとは隔離された世界の主として浮かんでいた。

「所長、魔力注入します」

一人の男が年輩の男に確認を取ると手前にあるレバーを引いた。遠くで機械が起動する音が響き渡り、そこにいた全員が息を飲んだ。

「圧力、上昇」

ポッドの中の少女がピクリと動き、うつすらとその目を開けた。

「目覚めました」

「圧力を上げる」

「了解」

目盛りは、人々が望む値へとかけ上がるように迫っていた。

そして、目盛りは目標値に到達した。全員がホッとため息をつく。しかし。

「！？所長！検体が！」

皆と悦びを分かち合っていた年輩の男は振り返り、その干からびた顔を更に干からびさせた。

少女が入っているポッドは激しく揺れて、中の少女は目玉が飛び出さんばかりの勢いで目を見開き、暴れていた。

このままでは暴走状態で外界に出ることになってしまう。そうなれば、おしまいだ。

「脊椎に筋肉破砕薬を注射しろ！急げ！」

しかし、部下がその命令を実行する機会は二度と訪れなかった。

少女は暴走した魔力を放出し、それと同時に空間を歪ませた。そして、そのまま施設は吹き飛んだ。

黒く炭化した死体の山を見つめる少女は、何を考えているか。誰にもわからなかった。

物語は、新暦0084年秋に遠く離れた地、ミッドチルダの閑静な住宅街から始まる。

プロローグ（後書き）

感想、待ってます

第一話 夜の梟（前書き）

殆ど説明

第一話 夜の梟

高町ヴィヴィオはいつもの部屋にいた。

変わらない部屋の間取り、変わらない窓、変わらない台所――。

しかし精神の奥深くが違和感を訴えている。

すると、玄関のチャイムが鳴った。

―ヴィヴィオ、買い物してきて両手が塞がってドアを開けられないの。開けて。

ママだ。ヴィヴィオには玄関の外でドアが開くのを今か今かと待っているなのは姿が鮮明に想像できた。

ヴィヴィオは部屋を飛び出て、廊下を駆け抜けてドアの前に立ち、ノブを捻った。

そのままドアを引く。

―なのはママ、おかえりなさい！

「ハッ!？」

高町ヴィヴィオは布団をはねあげて目覚めた。

「また、この夢を・・・」

夢じたいは淡い幻想が具現化したようなもののなに寝汗がひどく、呼吸も荒い。

枕元の目覚まし時計に目をやると目覚めのメロディが鳴り出す5分前だった。

未だにバクバクと跳ねる心臓を押さえつつ、ヴィヴィオは部屋の電気をつけ、風呂へ向かい、シャワーを浴びた。

「・・・」

シャワーを浴び、気持ちの悪い汗を流しきったあと、彼女は部屋

へと戻り、クローゼットを開け、着替える。

茶色のスカートを穿き、ブラウスを着てネクタイを締める。そしてその上にスカートと同じ色の上着を羽織った。

それは紛れもなく地上勤務の局員の制服。

そんな彼女の制服の左上腕の部分にワッペンがつけられていた。

ワッペンは所属部隊を示す物で、部隊名と設立年、そしてシンボルが刺繍されている。

しかし、彼女のワッペンは一風変わっていた。真っ黒な背景に浮かび上がる白い鼻^{ふくろう}。部隊名もなにも記されてはいない。

ヴィヴィオも今では管理局員の一人である。彼女に課せられた使命はこの次元世界の守護である。

ヴィヴィオはこの仕事に誇りを持っていた。やりがいもある。そして何より、自分の母が活躍した場なのだ。

だが、次元世界の守護の前にやらなければならないことがある。

「フェイトママ、起きて。朝だよ」

隣の部屋でぐーすか寝ているもう一人の母を起こさなければならぬ。

「ん、あと5分。いや、4分30秒・・・」

「何いつてるの！起きて！」

フェイトはヴィヴィオが布団を無理矢理別れさせるとぶつくさと不平を垂れながらもベッドから這い出てきた。

「朝御飯、もう作ってあるから。今日はスクランブルド・エッグだよ」

「ヴィヴィオ、もう行くの？」

玄関で靴を履く娘に金髪の母は聞いた。

「もうって・・・今7時半だよ」

フェイトは今ほ主にデスクワークに励んでいる。その為やや遅く出勤してもいいのだ。

ヴィヴィオは寝ばけ眼のフェイトに行ってきますと言って家を出た。

ミッドチルダの空は何処までも青く高かった。

特務部隊『夜の梟』隊舎は元々機動6課のあった場所にある。

これには特に深い意味はないが、一部の隊員たちにとっては思い入れのある場所である。

当時は半人前の局員として過ごした場所も、成長してから見るとやはり感じることはあるのだろうか。

「おはようございます」

「おはようヴィヴィオ。偉いわね。今日も一番」

オフィスの部隊長席に座っている女性が言った。

「いえ、ティアナさんが一番じゃないですか」

「私はここに泊まり込みだから」

その様なやり取りを交わし、席に着いた。

「おはようございます」

「キャラ、寝癖、寝癖」

オフィスに入ってきて早々ティアナに注意されたキャラは恥ずかしそうに笑いながらはねた髪の毛を押さえつつ席に着いた。

「おはようございます副隊長」

「相変わらずヴィヴィオは早いね。尊敬するよ」

思わず照れながらコンピューターを起動させる。

そしてヴィヴィオは腕時計を見た。

「あつ、もうすぐ8時半・・・3、2、1」

長針が12を指した瞬間、入り口が開いた。

「おはようございます。アインハルトさんは本当律儀ですね」

「それが取り柄みたいなんなんで」

アインハルトの後に、スバル、コロナ、リオという順番で入ってきた。オフィスは分隊ごとに分けられており、ヴィヴィオたちは入り口から見て左手にいる。

因みに、スバル、コロナ、リオはティアナとスバルが指揮する分隊の隊員だ。

そして、ヴィヴィオたちの分隊スペースにある席の内、まだ一つが空である。

まもなく9時。この時間を過ぎると遅刻になる。40秒前、ようやく空の座席の主が現れた。

「おはようございま・・・ブホッ!？」

エリオは入り口に現れて早々にキャロから消しゴムを投げつけられるという制裁を受けた。

「遅いよ!隊長なんだから、自覚持ちなよ」

「キャロ、僕は部下が余裕をもつて出勤できるように配慮して遅刻40秒前きつかりにここに入るんだ。上司が早く出勤したらなんか部下も早く来なきゃダメっぽくなるだろ？」

「屁理屈だよ。ヴィヴィオとかアインハルトはエリオ君の事なんか気にしてないから」

地味に傷ついたエリオは黙り混んで席に着いた。

こうして夜の梟の日常が始まる。

特務部隊『夜の梟』。

クロノ・ハラウン、八神はやて、聖王教会等の政治的支援を受けて設立された部隊。

その任務は簡単に言えば、大火事になる前に火を消すことだ。

この部隊の活躍により次元世界における犯罪発生率は約3割減少している。

正確には変わっていないのだが、ボヤの時に消してしまったため被害は出ないのだ。

しかしこの夜の梟。外から見ればかなりの秘密組織である。

どのような事件を揉み消し、どれだけの隊員がいるか、等が秘匿されているのだ。

局内では様々な憶測が飛び交っている。

―夜の梟部隊はクロノ提督の私設軍隊だ。―いや、八神司令の新部隊だ。

そして、そのなかで一番失笑を買い、一番真相に近い噂があった。
—あの部隊は極秘で質量兵器の保有が認められているんだ。だからあの隊舎は武器弾薬で一杯だ。

魔法の絶対性を信じる局員たちはそれを聞いてあり得ないと決めつけるが、その話を隅で聞いたヴィヴィオは思わず苦笑してしまう。
この噂は半分事実である。

事実と違つとすれば、武器は拳銃にコンバットナイフ程度でやはりメインは魔法だった。

武器は純ミッドチルダ製。自動拳銃は、12発装填できる。
違法武器やそれを使う犯罪を沈める組織がそれを使っているのは皮肉なものだとヴィヴィオは思う。

「僕たちは一応許可武器だけどね、やっぱり世間体は気にしないからね」

これはエリオがいつていたことである。

管理局の闇。それが夜の梟。

管理局にとっては、諸刃の剣——

その日の午前はデスクワークに没頭するつもりだった。

ティアナも一段落つき、コーヒーを啜っている。

平和だった。

出来ればこの平和を恒久的に貪っていたい。しかし、それは叶わぬ願いだった。

ティアナのデスクの角にある通信機が緊急入電を意味する甲高いアラームが鳴り響いた。

思わずコーヒーを吹き出したあと、何処からの入電かを確認した。

統合指令本部。

ティアナはボタンを押し、画面を表示した。

「八神司令、おはようございます」

『おはよう、て、もう昼やけどな。どや？部隊の調子は？』

「まあ、ぼちぼちといったところですよ」

はやては少し笑ったあと、本題にはいった。

『実はな、昨日から第19管理世界の駐屯地との連絡が取れなくなつてもたんよ』

「何かあったのですか？」

『わからんからティアナたちに頼もうとしとるんやないか』

「ごもつともです」

表示されている画面とは別に文字の羅列が机上に現れる。ティアナは横目でそれを見ていた。

『今回の任務は第19管理世界駐屯地の安否の確認。敵対物があれば殲滅せよ。以上！』

「了解」

そのやり取りを見ていたヴィヴィオは背中に冷たい氷が流れていくように感じた。

続く

第一話 夜の梟（後書き）

ご感想、待ってます

第二話 出撃、そして（前書き）

実はまだプロローグのようなものであったりします。

第二話 出撃、そして

第19管理世界「サリドマインド」は主に農産業が盛んな世界である。

いつもは自然に溢れ、人々の活気に溢れているはずのこの世界も、今となつては見る影もない。

その世界を支配しているのは今二つある。

人の住んでいた首府の街は瓦礫に支配され、自然溢れた森や山は荒廃が支配していた。

「酷い・・・」

サリドマインドの地に立つて、アインハルトが先ずそう言った。

次元港付近の町はほぼ無傷だったため、そこに避難民達が逃げ込んできている。そのため、直ぐに調査を開始できた。

「もう、訳がわからなかった。逃げるのに夢中で・・・」

「サリドマインド首府周辺都市にはおよそ1000万人が居住していると聞いていますが・・・」

「ここいる186人が唯一の生き残りだ」

それを聞いたとき、メンバーは敵がグループであると半ば確信していたのだ。

部隊は近くのホテルを本部として、活動を始めた。

ホテル、と言ってもそれはあくまで数日前までの話である・・・。

「大量虐殺・・・最低の行いね」

ティアナは吐き捨てるようにそう呟いた。

「他の大陸とも通信が途絶しています。元々、小さな世界です。もしかしたら・・・」

報告したコロナはそこまで言つて、しまったという表情を作ったが、ティアナは続けるようにと言った。

「証言は取れませんでした。代わりに、駐屯地守備隊の魔導師の方を発見しました」

何！？と、全員が体を前に押し出す。

コロナによれば部屋へと入ってきた魔導師は腕を折ったのか、ギブスをはめていた。

「ウィリアムズ・ポーラ陸士長であります」

「ポーラ陸士長、他の守備隊員は」

ポーラはその質問のあと直ぐに顔をしかめ、下を向いた。

「守備隊は、自分を残して全滅しました・・・」

ティアナもまた「そう」と呟き下を向いた。

「ああ！でも！死んだ仲間達と引き換えになる情報を、自分は持つております」

数百人の命に匹敵するものなどあるのかなとヴィヴィオは考える。
「自分のデバイスです。映像が、入っています」

デバイスに入っていた映像データをプロジェクターで白塗りの壁に写し出した。

画質はまあまあよい。映像はアンノウンが襲来し、緊急出動命令が掛けられたところからである。

「アンノウン？テロか」

ポーラが仲間の一人に話し掛けた。勿論、彼はもういない。

「魔導師が一人だけらしい」

「頭でも狂ったのかな」

そんなやり取りを聞いていると、映像の高度が急に上がった。飛んだのだ。

「北東だつて」

ポーラは体を北東に向けて飛行を始めた。

目標はすぐ目に入った。

それは目を覆いたくなる光景だった。

守備隊の骸の血と肉がコンクリートの地面にモザイク絵を描いていた。

そして、その壮大で残酷な芸術品の中央に一人の魔導師がたつて

いる。

否、あれは魔導師と読んでいいのだろうか？

『リンカーコアを・・・喰っているのか？』

アンノウンは守備隊の骸から抜き取ったリンカーコアを無邪気に食していた。

『バルセロナ！あそこをアップだ』

ポーラが命令すると画面がそのアンノウンをアップにしていた。
「！！！！！！」

画面がアンノウンを拡大していくにつれてメンバーの——中でも
ヴィヴィオの表情が驚愕のものへと変化していった。

アンノウンはまだ子供だった。

十歳前後で、栗色の髪の毛をツインテールにして白いバリアジャ
ケットを血で斑に染めている。

それはヴィヴィオが知っていて、知らない存在だった。

「なのはママ・・・」

ヴィヴィオがそう呟くと同時に画面の中のなのはが空洞のような
黒い瞳をこちらに向けた。

その時画面を見ていた全員に得たいの知れない恐怖が襲いかかっ
てきた。

基地の捜査は明日明朝となった。

この日、ヴィヴィオが眠れない夜を過ごしたことは、言うまでも
ない。

続く

第三話 再会と悪夢（前書き）

殴り打ち（？）感じがします・・・

第三話 再会と悪夢

基地内には生乾きの死体と腐乱臭が立ち込めていた。

しかし、『それ』はその空間を愛し、次の餌場へ行くための休養のためにそこで寝ていた。

そんな楽園を踏み荒らす存在を『それ』が許容するはずがなかった。

正面の戸はズタズタに引き裂かれており、進入は簡単だった。

輸送車のタイヤが土やコンクリート以外の何かを踏み砕く音が聞こえる度にヴィヴィオ等は全身を走る不愉快な悪寒に耐えていた。

「リンカーコアの反応は見えないわね」

車を運転しているのはポーラで、ティアナがレーダーを監視している。

「別の場所に移動したんじゃないですか？」

リオがそう呟いたとき、ティアナが叫んだ。

「魔力反応ッ！大きい！みんな、戦闘態勢」

すると、建物のうちの一つの壁が吹き飛び、瓦礫の中から『それ』が出現した。

（なのはママ・・・）

容姿は母になる前のなのはだが、ヴィヴィオにとってはそんなこと、関係ないのだ。

目の前で消滅した母。

三年前、新型デバイスの実験中に時空の歪みが発生して見学に来ていた愛娘の目の前で爪の垢一つ残さずに消滅した母。

それが今ヴィヴィオから数百メートルの場所にいるのだ。

しかし、その母は母ではないことは重々承知していた。自分が過去に拘束されていると気付いた時、どれだけ自分を嫌悪するだろうか。

「！ヴィヴィオ！戻って！」

気づけば、ヴィヴィオは無意識のうちに『それ』へ向かって駆けていた。キャロの呼び掛けにも応じず、ヴィヴィオは自分を縛る鎖を断ち切ろうとしていた。

「私を縛らないで・・・！」

拳を握り、嘆願を込めたそれをなのはを騙った『それ』へと放った。

しかし、予想していたとはいえ、とてつもなく厚いプロテクションによってそれは封じ込まれた。

跳びはね、一旦距離をおく。

ティアナ達も、其々の魔法で『それ』を攻撃していた。

「なんて厚い！」

エリオとスバルも一度突撃をかけたが、ヒビすら入らなかった。

しかも『それ』は足掻く梟達を嘲笑うかのように微動だしない。

「もう一度！」

ヴィヴィオは気合いを入れ直し、再び『それ』へと飛びかかった。案の定、プロテクションにより封じ込まれたが、粘ることにした。

「グウウウウ！」

拳に魔力を集中させ、より力を加える。

その時、ヴィヴィオの活力に富んだ瞳と、空洞のような瞳が重なった。

ヴィヴィオはその瞳に宇宙の深淵を垣間見た気がした。

星ぼしが瞬間的に煌めき、流れ星よりも儚く燃え尽きて行く・・・。

それを見たとき、ヴィヴィオは自分は戦ってはいけない、人類の禁忌に抗っているのではないかという思考に支配された。

そして、それが彼女に大いなる隙を作り出す。

「ヴィヴィオッ！？！」

全員の叫び声が重なって、木霊のようにヴィヴィオの脳を優しくゆさぶった。

その時左腕に衝撃を感じたが、それが何なのかは暫く知ることは出来なかった。

ティアナ率いる「夜の梟」はサリドマインドを後にすることになった。

敵はあまりにも強大だった。

ティアナは去り際に避難民の代表にサリドマインド退去用の次元航行艦の派遣を約束した。梟たちがのってきた航行船は非常に小さく、避難民をのせる余裕がなかったのだ。

とにかく、今は一秒でも早くミッドチルダに戻り、重傷を負った仲間を集中治療室へ放り込まなければならぬ。

大気圏を離脱し、次元航行の準備に取りかかった。

艦内は異様なまでの静けさに包まれ、人の存在を感じ取れなかった。

その時、ボケツと外を眺めていたスバルは、ワープアウトしてくる戦闘艦を目撃した。

「みんな！次元航行艦だ！」

スバルの声に反応した人々が窓によってくる。

三隻の次元航行艦は一樣に、サリドマインドへと向かっていた。

「珍しく対応が早いな」「やればできるじゃん」などと聞こえてくるなか、アインハルトだけが違和感を感じていた。すると、再び誰かが叫んだ。

「おい、あれはなんだ？」

アインハルトも舷窓により、戦闘艦を見た。

艦底のハッチが空いたかと思うと、そこから三つの光点がサリドマインドへと延びていった。

そこにいた全員が首をかしげる。しかし、アインハルトにはそれが何か、わかってしまった。

延びていった光点は、みるみるうちに大気のヴェールに消えていった。しかし、その直後、光点が何百倍もの光を放ち、それらは合

体してサリドマインドをゆっくりと飲み込んでいった。

全員があせる。あれは何なのか。住人はどうなったのか。

その中でただ一人、アインハルトだけがその正体知っていた。

核ミサイル。

タブーとも言える質量兵器、その中でもっとも凶悪とされる核ミサイルを管理局は使用したのだ。

アインハルトにはなのは擬きの存在がこれほどまでに管理局を動揺させる理由は検討もつかなかった。

第四話 平和と暗黒の香り（前書き）

これでプロローグ終わりかなあ

第四話 平和と暗黒の香り

ヴィヴィオは再びいつもの家にいた。

母の帰りを待ち、声が聞こえると玄関へ飛んで行く。

日常の、幸せな光景。

しかし、玄関を開け、入ってきたのは暗黒だった。

冷たく、生気のないそれはさすがのようにヴィヴィオの左腕に絡み付いてくる。

左腕が堪らなく冷たく、痛いほどだった。

誰か・・・助けて・・・。

口に出そうとしても見えない力が声帯を支配しているかのように発音が出来ない。

そうもがいていると、暗黒が言った。

——おいで——。

目が覚めると、そこにはいつもの寝室の天井ではなく、白く清潔な景色が広がっていた。

顔だけを起こして見渡すと、どうやらここは教会の病院のようだった。

霜がおりた機械のように鈍くなっている脳の解凍をしていると、向こうから話し声が聞こえてきて、それはどんどん大きく、はつきりしたもののへと変化していった。

扉が開かれ、人影が入ってくる。そして、白衣を着こんだ医者らしき人がヴィヴィオに話しかけた。

「気分は、どうかね」

「なんか、頭がぼうつとしてて・・・」

ヴィヴィオは起き上がるうとした。しかし、支えとなる左腕の存在が感じられず、思わずバランスを崩す。

「・・・えっ？」

「ヴィヴィオ、あのね・・・」

声のする方向へ顔を回転させるとそこにはリオとコロナの姿があった。

「ヴィヴィオの、左腕は、その・・・」

「リオ、コロナ、私の・・・私の腕は・・・」

何処？そう言おうとしたところへ先の医者が介入してきた。

「その事だ。今日の昼過ぎからそこに義腕をつける」

「義腕・・・」

「そうだ。戦闘機人の技術を使っているから成長と共に義腕も成長する。最新鋭のものだ」

話では、これまで通りの活動も可能らしい。

それならばよかった。

これで魔法が使えないとなれば、本当に自分はおしまいだ・・・。

三日後、ヴィヴィオが退院したため、皆で回復祝いとして飲みにいこう！ということになった。

ミッドチルダでは18歳から酒が飲める。もっとも、隊長達とアインハルト以外は飲めなかったが。

「よかったわね。一時はどうなるかと思ったわよ」

ティアナも程よく酔いが回ったのか、いつもと違いにこにこしている。

「ほらほらほら、ヴィヴィオ達も、飲みなつて」

「隊長・・・エリオさん、私たちはまだ未成年ですよ？」

ヴィヴィオが遠慮がちに断ったが、アルコールの力を借りて羽目をはずしかけているエリオは「えゝ？」と言った後キャラに同意を求めた。

「ちよつとぐらいさあ、良いじゃんかねえ」

「私に聞かないでよ。司令部に聞きなさい」

「ブー」

昔はキャラの方が元気でエリオがストッパーというイメージだった。

たが、今では逆だ。

（男はバカな生き物って言うのは本当なのかな？）

ヴィヴィオは些か失礼なことを考えた。

酒は飲まなくともはしゃぐと疲れるし、夜も更けてきて未成年者は帰る時間となった。

「隊長達はまだここに？」

リオが聞いてみるとティアナが「大人のお話よ。ガキンちょは早く帰りなさい」と言い、ヴィヴィオ、コロナ、リオはキャツと騒ぎ、アインハルトが顔をしかめた。ガキンちょ呼ばわりされたことが不服らしい。

「執務官志望者が聞くような話じゃないってことよ」

「そお、ですか・・・」

結局アインハルトもヴィヴィオ達と共に家路につくこととなり、挨拶をして帰ることとなった。

ヴィヴィオ等はこの後どのような会話が展開されるかを予想しながら歩いていたが、四人を見送った後にそこを漂っている空気は厳粛の一手前だった。スバルがまだ浮き足立っているからである。

「スバル、落ち着きなさい」

「はい」

スバルを落ち着かせると、ティアナは本題に入った。

「今回の事件。おかしいことになってると思わない？」

スバル以外。つまりすっかり落ち着いたエリオとキャロがこくりと頷いた。

「サリドマインドの一件はやはり核攻撃だったわ。生き残りの民間人と共になのはさん擬きを排除したわけね」

「核ってなに？」

「最悪の兵器よ」

スバルはイマイチ理解していないようだ。しかし、そんなことはお構いなしで話は進行していく。

「問題は、管理局の誰が命令したのか、ということよ」

ティアナはブンツとモニターを空中に出現させた。

「管理局には大小ひつくるめて数百になる艦艇を所有しているわ。でも、それらすべてに出撃記録は無い」

つまりそれはあの核攻撃が正式なものではないことを意味する。

「というわけでその真相を探るべく調査するのだけど、執務官の私がお下手に動いたら怪しまれる。スバルは・・・問題外ね。後はエリオとキャロのどちらかなんだけど、私はキャロを推したいわね」

「わ、私ですか!？」

キャロは予想外の振りに驚いた。

「エリオでもいいんだけど、キャロは小柄だし、フリードを伝書鳩みたいに使えもするから」

キャロはエリオに助けを求める眼差しを送ったが、何故かグットラックと親指を立ててきた。

一瞬へし折ってやろうかとも考えたが、ハア、とため息をつきティアナに向き直った。

「わかりました・・・微力ながら拝命します」

横を見ると、エリオはまだグットラックとやっており、意味はなにがむしゃくしゃしたので生まれてはじめて人を殴ることとなった。

続く

第四話 平和と暗黒の香り（後書き）

一応主役はヴィヴィオですよ。

第五話 生命の力が、それとも・・・（前書き）

急 展 開！少しやつつけ仕事。

第五話 生命の力か、それとも・・・

特務部隊隊舎の視聴覚室ではポーラがキャロが数日前に入手した映像の解説をしていた。

映像は緑豊かな何処かの管理世界を写したもので、熱帯雨林とおぼしき場所は生命の活力に満ち溢れているように見える。

しかし、その映像の場所を聞いたとき、人々は驚きを隠せなかった。

「この自然豊かな管理世界。実は、ここはサリドマインドなのです」
「嘘!？」

全員が思わず身を乗り出す。

「これは単なる記録映像ですが、観測機のデータもあります」

ポーラは中空にあるキーボードを軽く叩いた。すると、あっという間に映像は切り替わり、風景だけを映すものからデータも共に映すものへと変化した。

「この数値が放射能を示しますが、ご覧ください・・・これは生き物が住める環境ではありません」

確かに、このデータが狂っていない限り、いや、そもそもたった数週間で死の世界が命に満ちた新世界へと変貌を遂げるものか。

ヴィヴィオは質問する。「じゃあ、この木は何をエネルギーにして生きているんですか？」

この世界では空気に限らず、土、水、あるもの全てが放射能汚染されていることだろう。

「恐らく、我々の知っている木々と何ら変わらない生命活動をしていることでしょう」

ここでエリオの発した「では、何故？」という質問は全員の意見である。

「これも推測にすぎませんが、この世界の木々は放射能に適応したもののへと進化を遂げたのではないのでしょうか」

「バカな!？」

ティアナは驚く。普通進化は長い長い年月を経て少しずつ変化していくものである。到底信じられる話ではない。

が、事実、こうして死の世界は復活を遂げたのだ。

これにはうすら寒いものを感じずにはいられない。

「まあ、これは本家の科学者に任せるとして、本題に入るわけだけども」

ヴィヴィオは気を引き締めた。自然が復活した。それならば、アレも復活を遂げていても何らおかしくない。

「『なのはさん擬き』がまだ生きているかもしれない・・・」

「ヴィヴィオは、平気なの？」

リオとコロナに急に聞かれたヴィヴィオは始め戸惑いながら、答えた。

「腕は平気。シャーリーさんも何かおもしろい機能つけてくれたみたいだし」

「そうじゃなくて・・・!」

リオが軽い苛立ちを孕んだ声で言う。

「今度の戦いは、ヴィヴィオのお母さんが敵、ていうか、お母さんじゃないけど、その」

コロナがおどおどしながら言うのを見てああ!そういうことかと納得した。本当に、言い友達を持ったものである。

「ありがと。でもね、大丈夫」

「本当？」

「娘は、母を越えるものなんだよ」

そう、私はなのはママを越えなければならない。

あれはまさしく驚異だ。異形だ。化け物だ。

私の身体を、心を、そして未来を縛る鋼鉄の鎖。

それを砕かなくてはならない。

しかし、砕いてはいけない気もする。なんという優柔不断!

ヴィヴィオはそんな自分を恥じた。

その時玄関から悲鳴が聞こえてきた。

「なに？」

「えっ？」

三人は玄関へと駆けていく。そこへ行く途中の廊下の窓をみると、空はどんよりとした雲に覆われ、槍のような雨が止めどめなく降っていた。

続く

第六話 退場（前書き）

遅くなりました。

第六話 退場

時間は少し遡った頃。

雨はやむ気配を微塵も見せず、逃走者の身体を無慈悲に冷やし、体力を奪っていった。

「はあ、はあ・・・」

水溜まりを踏むたびに泥水が脚を汚したが、そのようなことに気をとられていたらあつという間にあの世行きである。

逃走者は橋の下に入り、追っ手をやり過ごそうとした。

「はあ、はあ・・・ン・・・」

腰に手をやったが、幾度となく転んだのだ。ホルスターには拳銃がなかった。

「ケリユケイオン、敵は近くにいます？」

敵・・・という表現は適切だろうか。

《まだ近くに居ます》

確かに、耳をすませば数人の声が聞こえた。

彼女は少し考えたあと、何かを決心したような顔をするとおもむるに左手に握られていた鞆を開けた。

「フリード・・・」

呼び掛けると、側に寄り添うようにしていた小さな使役竜が可愛らしい鳴き声をあげ返事した。使役竜の身体も雨に濡れている。

「これを・・・これをエリオ君に、私も後から行くから」

鞆から取り出した数枚の書類とデータディスクをビニール袋に入れて使役竜の首にかける。

「きゅるー」

使役竜は初めは不安げな目を少女へと向けていたが、それは与えられた使命を果たす男の目と変化した。

小さな身体にはこの程度の荷物も少し重いであろうが、使役竜は翼を羽ばたかせ暗い空に飛び立った。

と、その時、近くで火花が弾けた。

「見つかった？」

頭だけ外に出すと何かを構えた男が数人こちらへじりじりと近づいてきていた。

その中の一人に少女は指を向け、一呼吸置くと桃色の魔力弾を放った。

それは男に命中し、集団に動揺が走る。

《今です！》

デバイスの合図で彼女は橋の陰から飛び出し、闇を盾にしながら駆け出した。

今までにないほどの全力疾走だけあって速力はやけに速かった。そのお陰で数分で隊舎に到着できた。

『フリード、もう着いてるかな』

酷使した脚は感覚がおかしくなっており、細かく震えながら主人に不平をたてている。

安心した彼女は脚の動きを走りから歩きへと徐々に変換させていった。

ここはもう隊舎の敷地。奴等と言えどそうそう手を出せる場所じゃない。

その時、後方の雨に湿った空気を貫いて一発の鉛の塊が彼女の頸動脈を挟った。

ヴィヴィオ達が玄関ホールに出ると床を泥水と大量の血で汚しながら仰向けに倒れている上官の姿があった。

「副隊長！」

慌ててかけより、傷口を確認した三人の顔がひきつった。

ヴィヴィオはポケットから取り出したハンカチをキャロの頸に当てたが焼け石に水とはまさにこの事という具合にそのハンカチはすぐ朱に染まった。

「隊長を！早く」

「もう来てるよ」

コロナとリオが言うまでもなくエリオがホールにやって来た。

「・・・エリオ君・・・」

キャラの発した声はか細く、いつものような楽しそうな声ではない。

「頑張ったんだね。もうすぐ医務官が来てくれるから」

「もう、遅い・・・手遅れ」

エリオは自身が汚れることを意に介さずキャラの隣に膝をつけた。

「何いってんだよ、こんなの只の掠り傷さ」

「フリードは、もう着いた？」

その事からそこにいた全員が彼女がフリードに重要書類を託していることを推測できた。エリオは答える。

「ああ、確り、言われたことをやりとげてたよ」

そう、と答えた彼女は光を失いかけた瞳を天井に向け、再びエリオの顔へ移した。

「お風呂、いれてあげて。きっと雨でびちょびちょだから」

「わかった。わかったからあまりしゃべちゃ駄目だよ」

聞こえないのか、無視したのかはわからない。しかし、彼女は一瞬瞳を激しく光らせ、エリオ、そしてヴィヴィオ、コロナ、リオに言った。

「負けたら駄目、絶対に。勝って・・・皆・・・」

そういうと、彼女はゆっくりと、目を閉じ脱力したかのようになった。

エリオは呼び掛けながら軽く身体を揺らしていたが、キャラが再び口を開くことは永久にないであろうことはヴィヴィオにも理解できたのだった。

フリードはビニール袋に書類やデータを入れてゆっくりと飛来してきた。フリードはやはり雨や泥で汚れており、エリオは言われた通りに風呂を沸かして体をあらってやったが、いつもは主人がやつ

てくれることをエリオがやっているのが不思議な様子で、エリオを
じっと見つめていた。

その視線がいまはたまらなくいたかった。

第七話 終焉の笛

数日後・・・第一訓練場

『よし、ヴィヴィオ、ティアさんの銃撃止めてみようか!』

「はいっ!」

訓練場に威勢の良い返事が木霊する。

「いくよ!」

ティアナが掛け声と共に橙色の魔力弾を放つ。それとほぼ同時に、ヴィヴィオは左腕を前にかざした。

「AMF起動・・・!」

すると、彼女の目の前に見えない障壁が現れ、ティアナの魔力弾を消滅させた。

「すごいなあ」と、見物席の面々は言う。

「魔導師がAMFを使うとは、なんとも矛盾した話ですけどね」

ヴィヴィオは皮肉ってみるが、聞こえなかったようだ。

彼女の義手は技術官のシャーリー達が作ってくれた試作品であり、悪い言い方をすればヴィヴィオはモルモットだった。

「AMF発生装置は通常稼働で三十分、全力稼働で三分だから、確り考えて使えよ」

監督に来ていた技術官はスピーカー越しにそう伝えてきた。

叫んでも聞こえないことはわかっているのでヴィヴィオは腕を振ってわかったと伝えた。

『サリドマイン드의悪魔が動き始めたようです』

「そっか」

観測士官の報告によって最新の情報を手に入れたはやては浮かない顔をしながら椅子を回転させた。

「・・・どうぞ?」

ドアのノック音に答えると、見知った顔の女性が入室してきた。

「ああ！シグナム！久しぶりやなあ、元気にしとった？」

「お久しぶりです、我が主。お陰さまで、元気なままです」

「座って。今、お茶でもいれるよ」

シグナムは、空戦隊の一員としてここ二ヶ月間別の世界へ赴いていたのだ。

はやてが淹れてくれた茶を飲み、少し間を置いて彼女は話始めた。

「主、サリドマインドでの一件は？」

「やっぱり知っとったか。流石はシグナムやなあ」

シグナムははやてとはかれこれ十数年の付き合いとなる。彼女が何か隠し事をしているのは歴然だった。

「・・・どないした？」

「何か隠し事をしてはおりませんか？」

はやてとはかぶりを振って、

「そんなことはない。家族にはちゃんとあな」

「・・・キャロが死んだとか・・・」

「ン・・・、あれは不幸な事故やったからな」

そこまで話したとき、シグナムはハツとして、思った。

『自分は我が主を疑っているのか？私たちに嘘なぞついたこともない主を』

そう思ったものの、彼女の感覚がはやてから概念的に死臭が漂ってくるのを否定できなかった。

「なら、いいのです・・・」

シグナムはこの部屋にすることが苦痛と感じる自分を責め立てていた。

目の前の人は着る人によって印象が変わる服を連想させた。

今、八神はやてという服を着込んでいる人物は誰なのだろうか・・・。

空いた副隊長の席にはアインハルトが座ることとなった。

「フェイトさんの調子はどうだい？」

エリオの声は何時もよりも重いものだった。

「完全に鬱ですね」

「そうか……」

フェイトのことを気にしているエリオだが、彼も己の半身を失ったも同然であり、精神的負荷となっていることはヴィヴィオにもわかった。

しかし、時代の濁流は彼等に傷心の間を与えることを許さなかった。

ティアナの元へ本局から命令が下ったのだ。

「本局から？地上部隊の私らに？」

妙なことだと思い、調べてみたところ、これは全ての部隊へ画像と共に伝達されているものだった。

命令の内容は驚く、等を通り越して最早呆れすら感じさせるものだった。

『旧サリドマインドに出現した生物型ロストログアを撃滅されたし』

「核兵器を使っても生きている相手に勝てるものか！？」

そう思うも、命令なのだから仕方がない。

彼女は添付画像を全員に転送した。

転送された画像を見てスバルは驚嘆の声をあげた。「生き物？これが！？」

画像に写っていたものは以前見たいわゆる『なのは擬き』ではなく、巨大な黒曜石を直方体に切り出し、研磨したようなものだった。画質はそれほどよくないが、半透明で、正確に1：4：9の比率で存在している。

「この写真を撮影した船はこれを本局へ転送した直後に消失したぞうよ」

見た目はただの直方体だが、これには多くの災厄が詰め込まれているらしい。

だが、ヴィヴィオにはこれがただ災厄を振り撒くだけの存在には

見えなかった。

直方体の物体は次元の海を遊いでいた。

それに意思はあっても主導権はない。指示された通りに動いているだけだ。

サリドマインドの一件も不完全な状態からの発達には必要だったのだ。

そんな彼女はやはり何も考えずに漂っているだけだ。しかし、それもしきに終わるだろう。

続く

第七話 終焉の笛（後書き）

1：4：9の物体はアーサー・C・クラークの宇宙の旅シリーズに登場するモノリスをイメージしてください。

第八話 防衛線

展開した艦隊は、役に立たなかったらしい。

その証拠として、ティアナの見上げるクラナガンの空には不気味な黒の直方体が浮遊している。

予想に反して直方体は恐ろしい程巨大であった。このクラナガンの空を完全に覆っている。

しかし、太陽光は遮断されておらず、柔らかい日差しがさんさんと地上に降り注いでいた。それがまたなんとも不気味である。

直方体が現れた時、それこそ街はパニックとなった。ところが、直方体は高度1000メートルでピタリと停止し、それ以来、ピクリとも動いていない。それから2週間。街は日常を取り戻した。

だが、管理局は何時アレが市民を攻撃してきても対応できるようにクラナガン一帯に展開している。それを市民は迷惑そうな視線で見やるのだ。

「ランスター、そっちはどうだ」

ティアナが声のする方向へ顔を向けると陸士108部隊のゲンヤ・ナカジマ一佐がこちらに歩いてくるのが見えた。

今、夜の梟は彼の部隊と共同でこの区画を警備しているのだ。

スバルは、姉妹達と仕事ができるので嬉しそうだったとティアナは思う。

「こちらは何とも。気味が悪いほど平和です」

「だなあ」と、ゲンヤも空を見上げる。

「まるで、奴が俺たちに審判を下そうとしているようだ」

ティアナはそれはどういう意味か聞き返した。

「そのままだ。俺達が奴にとって合格点なら一件落着。不合格なら――」

「不合格なら？」

ゲンヤは表情を変えずに呟く。

「どちらにせよ、一件落着だ」

かつて母——いや、母の形だった物は今では完全に無機物的な物体と化した。

幾ら虚像の母であっても、その形が失われるのがヴィヴィオにとつて哀しい、というか残念なものだった。

最近思ったことがある。

アレこそが、人類の進化の終着点、完全なる生命体なのではないか？

自分達は群がることで身を守り、安らぎを得、子孫を産み出して行く。

しかし、あれは完全に個体として存在し、誰の助けも得ないで生きているのだ。

それは神への挑戦ではないか？

そのようなものへの抵抗が自分達に許されているのか？

「・・・ヴィヴィオ？」

思考の中に潜行していた彼女は突然の訪問者——リオとコロナに對して過剰に反応してしまった。

「大丈夫？」

「あ、あはは・・・大丈夫、大丈夫」

返事は曖昧だが、顔色は良いため二人とも安心の吐息を漏らした。コロナが街に行く通行人に目を向け、呟く。「見てよ、皆慣れちゃって」

「私らの苦労も知らないで」

「まあ、リオもそんな力じゃないでさ」

苛立ちが募るのも無理はない。2週間ずっとこうなのだ。

ヴは改めて上空の直方体を見上げた。本当に、いったいあれは何なのか。

「・・・？」

その時、ヴィヴィオは異変に気付いた。

直方体の面の中心部がうつすら輝きだしたのである。

それはラメのような輝きで、一瞬の間の後、水面の波紋のように周りへと拡散していった。面の末端に到達した光はそのまま外へ放出され、直方体を取り込む形で空中を乱舞した。

地上のそれに気が付いた人はその美しさに心奪われ暫し呆然としていた。

が、それも直ぐに破られる。

直方体の光の発生したところから鈍い光の波紋を浮かべた同色の小さな直方体が矢継ぎ早に出現したのである。

その出現は全く無音であったが、それは反射的にすべての人々に混乱と得体の知れない恐怖を否応なしに押し付けた。

時刻は丁度昼下がり。オフィス街を中心に発生した混乱の荒波はあつという間にクラナガンを飲み込んだ。

『手の空いている局員は民間人の誘導を、武装局員は戦闘体制をとれ』

何処からともなく聞こえてくる伝達は声が明らかに震えていた。

直方体の群れは焦らすようにゆっくりと降下する。

「ッ？なんだあいつら？」

局員の誰かが高層ビルの屋上を示した。ヴィヴィオも——魔法で視力はあげれるが確実な手段として——双眼鏡でそこを見た。

そこにいたのは狂信者の群れである。この期に及んで金儲けを思い付く輩はいるもので、精神的に追い込まれた人々を食い殺して行く。

狂信者の群れは『教祖』の言葉を信じたのだ。

「あの直方体は神々が我々に送った使者だ。貢ぎ物と、祈りを捧げれば救済される」

ヴィヴィオとしてはそれは馬鹿馬鹿しいの一言で一蹴してしまうが、狂信者達はそれに感嘆を受け、神々に救われるべく大金をつぎ込み、祈りを捧げていたのだ。

彼等は小さな直方体の群れを神々からの迎えと思い、高層ビルの屋上へ集結した。

それを直方体は無機質な目——そもそもそのようなものは無いであらうが——で見下ろしていた。

狂信者達は感動のあまり、涙を流しているものや更に祈りを捧げているものもいた。

しかし、直方体の脳はそれに感激や哀れみを感じることはなく、ただ事務的に「不適合」の烙印を押すだけであった。

直方体が数体、狂信者達をぐるりと囲むように集結する。

「オオ！」と狂信者達は歓声をあげ、両手を空に突き上げた。そして、祈りの言葉を、中身のない、虚構の言葉を声高に唱える。

その刹那、直方体は眩い虹色の光を放ち、狂信者達の肉体を原子へ還元した。

彼等はこれから新たな物質の誕生に貢献するだろう。

「バイタルサインが消えた!？」

モニター車の中でティアナが吠える。

「ハッ・・・熱反応や残留魔力も感知されません。完全に消滅しました」

ティアナは舌打ちした。いかに自業自得でも市民に被害が出てしまったのだ。

「スバルッ！聞こえる?」

『感度りょーこー！聞こえるよ』

「あんたは姉妹達と市民の誘導をしなさい！地下シエルターよ」

スバルが『りょーかい!』と答える。元気だけは良い。

少し頬を綻ばせた後、キッと引き締めて次の命令を放った。

「エリオ！聞こえる?」

『聞こえます』

ティアナは二秒間だけ黙り、呼吸を整えて続けた。

「貴方は統合指令本部へ・・・」

『・・・・・・・・・・』

「返事はッ!？」

『了解しました』

返事を聞くとティアナは通信を切った。

クラナガンの、ミッドチルダの、次元世界全体を揺るがしかなない片想いのな防衛戦が、始まった。

続く

第九話 直方体

ヴィータは例の直方体に動きがあったと聞いて出撃準備をしていた。

指令本部のロビーで部下——彼女にも部下はいるのだ——に連絡をしているとき、そこへ懐かしい人物がやって来た。

「お、エリオじゃねーか。こんな時に何しに来たんだよ？」

六課時代なら『気が緩んでいる』と鉄拳制裁でもかましていただろうが、今は相手も大人だ。口調は軽く、それでも重い感じで問いただす。

しかし、エリオはヴィータを一瞥したあと軽く会釈してエレベーターへ向かうだけだった。

「！？」

流石にこれにはヴィータも力チンと来た。

速足でエリオに追い付く。

「何なんだよ！お前——」

すると、エリオはヴィータの言葉を遮って内ポケットから一枚の書類を取りだし、文面を見せた。

「八神司令を拘束するようにと命令を受けています」

ヴィータは文面の意味を理解するのに二秒ほどかかった。

「・・・はやてがなにしたらってんだよ！？オイ！」

「・・・」

「何だよお前！そんな訳のわからない命令を受けて昔の上司を——」

ヴィータはエリオを怒鳴りながら文章を読み進めていたが、最後のサインの欄を見て息を飲んだ。

発令責任者 ティアナ・ランスター

証明入 キャロ・ル・ルシエ

「キャロが命を懸けて手に入れた情報をもとに執務官の命令で僕は動いているのです」

「そんなっ・・・テメエ等なあ・・・！」

その時、向こうからヴィータを呼ぶ声が聞こえた。

「シグナム！おいシグナム！お前からもなんか言えよ！」

シグナムは主を守るためなら命も投げ出す騎士である。きっとこの訳のわからない命令も間違いだと証明してくれるだろう。

ヴィータはそう思った。

しかし、シグナムの言ったことはヴィータにも、エリオにも意外なものだった。

「ヴィータ、行かせてやれ」

ヴィータは耳を疑う。「行かせてやれ、だって？」

彼女は全く理解できない、という顔をした。

「だって——シグナム・・・」

シグナムはヴィータを諫めるような目をしたあと、エリオに向き直って、

「主を・・・頼む」

「はい」

エリオは踵を返し、エレベーターへと向かった。

市街はまさしく混乱の極みにあった。

それは管理局員も同じである。

街に降り立った直方体に一人の魔導師がアクセルシューターを撃ち込んだが、あり得ないほど分厚いプロテクション・・・いや、また違うものに守られており、掠りもしなかった。その返答として、武装局員はあの狂信者達のように原子に還元された。

魔法が効かない。それでさえ恐怖であるのにその直方体は人々を品定めするように光ってからその対象を全て完全に消滅させているのだ。

この恐怖のエネルギーは直ぐに伝播し、局員の中には逃亡を図るものさえ出てきた。

「あっ！ダメだこりゃ」

魔法が効かないのならば、と召喚師達が物理攻撃を放つもやはり効かない。

コロナのゴーレムも直方体に近付くと崩壊してしまう。物陰に隠れながらヴィヴィオも打つ手はないか、と考えていた。その時、ふと左手を見た。そして、使えるのではないか、と考える。

「ティアナ部隊長、応答願います」

『どうしたの？』

ティアナの念話には希に爆発音に似た音も混じっていた。恐らくあちらも戦闘中なのだろう。

「実はですね・・・」

ヴィヴィオの考えていた作戦はティアナを戦慄させるに十分足るものだった。

『そんなの・・・危険すぎる』

「危険でも、やらなければいけないんです！」

ヴィヴィオがそう言うのとティアナは数秒間の思考の後、答えを返した。

『わかった。今からスバルを寄越すからそこで待つように』

エリオはエレベーターを降りたあと、司令官執務室へと向かい、そのまま扉を蹴破った。

スタラーダを起動させてかつての上官にその矛先を向ける。

「・・・なんや、エリオ。えらい慌てて」

机で事務仕事を淡々とこなしているはやての姿はいたって自然体であった。

「八神司令、アナタに逮捕命令が出ています。僕とご同行願えますか」

文的には疑問型だが、実状は命令である。エリオの持つ書類には法的拘束力がある。

「罪状は？」

はやては視線を机に向けたまま問いかけてきた。

「違法研究の援助です」

聞かれたことに答えると、彼女は意外そうな顔をしながらこちらを見つめ、半瞬後に笑いだした。

「違うな、エリオ。あれは私が援助したんじゃない。私が指揮を執ったんや」

エリオは息を飲んだ。その時のはやての瞳には以前のような柔和さは無く、ただ深い狂気が無限に続いているだけだった。

ヴィヴィオはスバルにおんぶしてもらって天に向かってウイングロードを駆けていた。

戦闘機人のスバルは直方体の放つ魔力に汚染されにくいのだ。

「スバルさん、大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ。私はこれで1500メートルくらいまで上がれるから」

この高度は空戦魔導師と比べたらかなり低いが、今はそれで十分だった。

まだ100メートル以上離れているにも関わらず巨大な直方体は圧倒的な大きさを誇っており、遠近感を麻痺させた。

先程から幾つもの小さな直方体とすれ違っているのだが、こちらには見向きもせず地上へ降下していった。

『私達に気付いていないのか？』

「ヴィヴィオ！」

ハッ、と気がつくともうすでに直方体から20メートルのところまで来ていた。直方体のなんだかわからない黒い肌はてを伸ばせば簡単に触れそうである。

「私はこれ以上近づけない！ヴィヴィオ、絶対に生きて帰ってきてね！」

「はい！」

ヴィヴィオも空戦技術は身に付けていた。自力で一気上昇する

ことは無理でも、運んでもらえばなんとかなる。

彼女は直方体の肌に左手をかざした。

「AMF起動！」

左手からモーターの回るような音がする。

そして、そこから放たれた指向性のフィールドは一本の槍となり、直方体の魔力障壁に穴を開けた。

「よし！」

ヴィヴィオはAMFを全開しながら直方体へ突き進んだ。

直方体の肌は固く冷たいものなのだろうか？

だが、ヴィヴィオにその感触を確かめる機会を訪れない。

「！？」

突如、直方体の一部——ヴィヴィオの進行方向の肌が音もなく開いたのだ。

現れた穴のなかには星の煌めく空間であるように見えた。

「これ自体宇宙を内包している？」

迷ってはられない。

ヴィヴィオはそこへ飛び込んだ。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1554x/>

リリカルなのはVivid-NewGeneration0084

2011年12月1日17時53分発行